

その他評価が必要な暗号技術

ハッシュ関数に関する調査

2001年 1月

- 1 . MD5
- 2 . RIPEMD-160
- 3 . SHA-1

Abstract

Cryptographic hash functions have been designed in the first place to protect the authenticity of information.. As a practical cryptographic hash functions, dedicated hash functions have been proposed. Dedicated hash functions are those which are specifically designed from scratch for purpose of hashing, with optimized performance in mind. Those having received the greatest attention in practice are based on the MD4 hash function. MD4 was designed specifically for software implementation on 32-bits machines. Security concerns motivated the designed of MD5 shortly thereafter, as a more conservative variation of MD4. Other important subsequent variants include the SHA-1 and the hash function RIPEMD-160. However, the evaluation of MD4 based hash functions is difficult because the hash functions are designed by “trial-and-error” procedure. In general, the resistance of a particular hash function to known general attacks provides a measure of security. Accordingly, for the evaluation of the security of MD5, RIPEMD-160 and SHA-1, the attacks against them should be investigated. Therefore some attacks against MD4 based hash functions are reviewed in this report. This report shows that some attacks against MD5, RIPEMD-160, and SHA-1 do not yet threaten practical applications of them as well.

1. はじめに

今日暗号学的一方向性ハッシュ関数（以下，単にハッシュ関数という）は現代の暗号技術においては基本的な構成要素の1つとして必要不可欠な存在になっている。特にデジタル署名におけるハッシュ関数の役割は大きく，安全なデジタル署名の構成のためには安全なハッシュ関数が必要不可欠である。ここで，暗号分野で用いるハッシュ関数に要求される性質としては

- (1) Preimage resistance
- (2) 2nd preimage resistance
- (3) Collision resistance

の3条件が挙げられる。これらの要求条件を満たすべく今日まで様々なハッシュ関数が提案されて来たが，現在幅広く使われているのは基本的に Merkel と Damgard の理論に基づいた繰り返しハッシュ関数（Iterated Hash Function）である。特に MD4 が提案されて以来，その構造に基づいた多くのハッシュ関数が提案され，また，解析されてきた。現在，安全であると考えられているハッシュ関数としては MD5, RIPEMD-160, SHA-1 が挙げられる。本報告書ではこの3つのハッシュ関数の構造とその安全性に関して述べる。

2. 歴史的な背景

1990年にRivestによりMD4が提案されて以来,MD4の設計に基づいた多くのハッシュ関数が発表されて来た.MD4は32ビットマシンに適合するように設計されたハッシュ関数であるため,ソフトウェア実装しても高速である.次いで1991年にはMD4を改良したMD5が提案された.さらにヨーロッパのRIPE(Race Integrity Primitive Evaluation)プロジェクトではMD4・MD5に対する評価を行い,それに基づいてMD4の変形であるRIPEMDが1995年に提案されている.また,翌1996年にはRIPEMDを改良したRIPEMD-128/160がDobbertin, Bosselaers, Preneelにより提案された.一方,米国では1993年にNIST(National Institute of Standard and Technology)によるFIPS PUB 180においてSHA(Secure Hash Algorithm)が発表され,1995年にはSHAの改良であるSHA-1が発表された.SHA-1は米国政府の標準ハッシュ関数として現在公認されている.これらMD4に基づいたハッシュ関数は高速ではあるが,その設計の基準などがこれまで特に明確にされていないため,その安全性の評価を行うにあたっては非常に困難が付きまとう.一般にこれらMD4に基づいたハッシュ関数の安全性を評価する際には全探索攻撃より効率的な攻撃が存在するか否かにより評価される.

3. MDx 族ハッシュ関数

MD4 に基づいて構成されたハッシュ関数を MDx 族ハッシュ関数と呼ぶ。MDx 族ハッシュ関数は入力関数，圧縮関数，出力関数で構成されている。

3.1. 準備

3.1.1. 入力メッセージの変換

MD4 に基づいたハッシュ関数は入力メッセージをブロックごとに分け，整数に変換してハッシュ関数の入力として使う。この入力の変換は多少の違いはあるが，すべての MDx 族ハッシュ関数におけるプリプロセスとして使われるためここでまとめて説明する。入力メッセージは 32 ビットの整数に変換された後，長さが 512 の倍数になるようパディング処理が行われる。

メッセージを 32 ビットで表現するための変換方式として，Little-endian と Big-endian がある。今，バイト列 B_i が与えられたとする。ここで i はメモリアドレスである。

Little-endian 方式は変換式 $W = 2^{24} B_4 + 2^{16} B_3 + 2^8 B_2 + B_1$ により 4 バイト

の列 B_1, B_2, B_3, B_4 を 1 つの 32 ビット整数 W に変換する。Big-endian は

$W = 2^{24} B_1 + 2^{16} B_2 + 2^8 B_3 + B_4$ により 32 ビット変換する方式である。

3.1.2. 基本演算

メッセージをハッシュする部分を圧縮関数と呼ぶことにすると MDx 族ハッシュ関数の圧縮関数はブール関数，法 2^{32} での加算，巡回シフト演算で構成される。以下，法 2^{32} での加算は $+$ ， n ビット左巡回シフトは $\ll n$ と表現する。

3.2. MD5

MD5[R92b]は MD4 に対する攻撃[BB91]が発表された後，Rivest により 1991 年に提案されたハッシュ関数である。基本的に MD4[R92a]の構造に基づいているが，MD4 を次のように改良した物である。

- (1) ラウンド数を 4 ラウンドに増やした .
- (2) 各ステップで異なる定数を用いた .
- (3) 2 ラウンド目のブール関数をより非線形性を持つように構成した .
- (4) ステップ関数で , 前ステップで計算された変数を加えることで “ Avalanche effect ” を増やした .
- (5) 2 , 3 ラウンドにおける入力が互いの順番が変えた .
- (6) 高速 “ Avalanche effect ” のため , 各ラウンドで巡回シフト量が最適化した .

3.2.1. 入力

入力は Little-endian 方式により 32 ビット整数に変換され , 512 ビットブロックに分けられる . 512 ビットのメッセージブロックを $X = (X[0], X[1], \dots, X[15])$ と表現すると各 $X[i]$ ($0 \leq i \leq 15$) は 32 ビットであり , 次に説明する圧縮関数のステップ関数への入力として使われる .

3.2.2. 圧縮関数

圧縮関数の計算には 4 つの連鎖変数 (A,B,C,D) を用いる . (A,B,C,D) の初期値

$IV = (h_1, h_2, h_3, h_4)$ としては

$$h_1 = 0x67452301, \quad h_2 = 0xefcdab89, \quad h_3 = 0x98badcfe, \quad h_4 = 0x10325476$$

を用いる . また , MD5 で使われるブール関数は次のように定義されている .

$$f(x, y, z) = (x \wedge y) \vee (\bar{x} \wedge z)$$

$$g(x, y, z) = (x \wedge z) \vee (y \wedge \bar{z})$$

$$h(x, y, z) = x \oplus y \oplus z$$

$$i(x, y, z) = y \oplus (x \vee \bar{z})$$

このブール関数と 2.1.2 で与えた演算記号を用いると MD5 の圧縮関数のステップ関数は次のように表される .

- 1 ラウンド $FF(A, B, C, D, X[i], s, K[j]) : A = B + (A + f(B, C, D) + X[i] + K[j]) \lll s$
 2 ラウンド $GG(A, B, C, D, X[i], s, K[j]) : A = B + (A + g(B, C, D) + X[i] + K[j]) \lll s$
 3 ラウンド $HH(A, B, C, D, X[i], s, K[j]) : A = B + (A + i(B, C, D) + X[i] + K[j]) \lll s$
 4 ラウンド $II(A, B, C, D, X[i], s, K[j]) : A = B + (A + i(B, C, D) + X[i] + K[j]) \lll s$

ここで, $K[j]$ ($1 \leq j \leq 64$) は $2^{32} \cdot \text{abs}(\sin(j))$ の整数部分とする . ただし, j は Radian 値である . $X[0] \sim X[15]$ は表 1 で与えられる順番によりステップ関数に入力される .

表 1 メッセージの適用順番

Step	Round 1	Step	Round 2	Step	Round 3	Step	Round 4
1	X[0]	17	X[1]	33	X[5]	49	X[0]
2	X[1]	18	X[6]	34	X[8]	50	X[7]
3	X[2]	19	X[11]	35	X[11]	51	X[14]
4	X[3]	20	X[0]	36	X[14]	52	X[5]
5	X[4]	21	X[5]	37	X[1]	53	X[12]
6	X[5]	22	X[10]	38	X[4]	54	X[3]
7	X[6]	23	X[15]	39	X[7]	55	X[10]
8	X[7]	24	X[4]	40	X[10]	56	X[1]
9	X[8]	25	X[9]	41	X[13]	57	X[8]
10	X[9]	26	X[14]	42	X[0]	58	X[15]
11	X[10]	27	X[3]	43	X[3]	59	X[6]
12	X[11]	28	X[8]	44	X[6]	60	X[13]
13	X[12]	29	X[13]	45	X[9]	61	X[4]
14	X[13]	30	X[2]	46	X[12]	62	X[11]
15	X[14]	31	X[7]	47	X[15]	63	X[2]
16	X[15]	32	X[12]	48	X[2]	64	X[9]

また左巡回シフト量 s も以下のように各ステップごとに定義されている .

表 2 左巡回シフトの値

Step	Round1	Step	Round 2	Step	Round 3	Step	Round 4
1	7	17	5	33	4	49	6
2	12	18	9	34	11	50	10
3	17	19	14	35	16	51	15
4	22	20	20	36	23	52	21
5	7	21	5	37	4	53	6
6	12	22	9	38	11	54	10
7	17	23	14	39	16	55	15
8	22	24	20	40	23	56	21
9	7	25	5	41	4	57	6
10	12	26	9	42	11	58	10
11	17	27	14	43	16	59	15
12	22	28	20	44	23	60	21
13	7	29	5	45	4	61	6
14	12	30	9	46	11	62	10
15	17	31	14	47	16	63	15
16	22	32	20	48	23	64	21

3.2.3. 出力

MD5 は圧縮関数の最後のステップで求められた連鎖変数の値と最初の初期値 IV を加えた後 (A,B,C,D) の 4 つの変数を結合することで 128 ビットのハッシュ値を出力する。

3.3. RIPEMD-160

RIPEMD-160 は RIPEMD に対する攻撃[Dob97]に基づいて改良されたハッシュ関数である。RIPEMD-160 は右ラインと左ラインの 2 つのアルゴリズムを並列で走らせて、任意長のメッセージから 160 ビットのハッシュ値を出力する[DBP96]。RIPEMD-160 は MD5 のように入力の順番と左巡回シフト量が右ラインと左ラインに対して定められている。5 つの連鎖変数(A,B,C,D,E)を用い、5 ラウンド 80 ステップで構成されている。

3.3.1. 入力

入力メッセージは Little-endian 方式により 32 ビット整数に変換され, 512 ビットのブロックに分けられる. 16 個の 32 ビット入力 X[0]~X[15] は定められた順番によって右ラインと左ラインに入力される. 表 3 でその入力順番を示す.

表 3 RIPEMD-160 のメッセージの適用順番

Step	Round1	Step	Round 2	Step	Round 3	Step	Round4	Step	Round5
	Left Right								
1	X[0] X[5]	17	X[7] X[6]	33	X[3] X[15]	49	X[1] X[8]	65	X[4] X[12]
2	X[1] X[14]	18	X[4] X[11]	34	X[10] X[5]	50	X[9] X[6]	66	X[0] X[15]
3	X[2] X[7]	19	X[13] X[3]	35	X[14] X[1]	51	X[11] X[4]	67	X[5] X[10]
4	X[3] X[0]	20	X[1] X[7]	36	X[4] X[3]	52	X[10] X[1]	68	X[9] X[4]
5	X[4] X[9]	21	X[10] X[0]	37	X[9] X[7]	53	X[0] X[3]	69	X[7] X[1]
6	X[5] X[2]	22	X[6] X[13]	38	X[15] X[14]	54	X[8] X[11]	70	X[12] X[5]
7	X[6] X[11]	23	X[15] X[5]	39	X[8] X[6]	55	X[12] X[15]	71	X[2] X[8]
8	X[7] X[4]	24	X[3] X[10]	40	X[1] X[9]	56	X[4] X[0]	72	X[10] X[7]
9	X[8] X[13]	25	X[12] X[14]	41	X[2] X[11]	57	X[13] X[5]	73	X[14] X[6]
10	X[9] X[6]	26	X[0] X[15]	42	X[7] X[8]	58	X[3] X[12]	74	X[1] X[2]
11	X[10] X[15]	27	X[9] X[8]	43	X[0] X[12]	59	X[7] X[2]	75	X[3] X[13]
12	X[11] X[8]	28	X[5] X[12]	44	X[6] X[2]	60	X[15] X[13]	76	X[8] X[14]
13	X[12] X[1]	29	X[2] X[4]	45	X[13] X[10]	61	X[14] X[9]	77	X[11] X[0]
14	X[13] X[10]	30	X[14] X[9]	46	X[11] X[0]	62	X[5] X[7]	78	X[6] X[3]
15	X[14] X[3]	31	X[11] X[1]	47	X[5] X[4]	63	X[6] X[10]	79	X[15] X[9]
16	X[15] X[12]	32	X[8] X[2]	48	X[12] X[13]	64	X[2] X[14]	80	X[13] X[11]

3.3.2. 圧縮関数

圧縮関数の計算には 5 つの連鎖変数 (A,B,C,D,E) を用いる. A,B,C,D の初期値は MD5 と同じ値であり, 新しく E の初期値が定められている. (A,B,C,D,E) の初期値

$IV = (h_1, h_2, h_3, h_4, h_5)$ を以下に示す.

$h_1 = 0x67452301$, $h_2 = 0xefcdab89$, $h_3 = 0x98badcfe$, $h_4 = 0x10325476$, $h_5 = 0xc3d2e1f0$

この初期値は左右両ラインで共通に用いられる。また、圧縮関数では次の5つのブール関数を用いる。

$$\begin{aligned}f(x, y, z) &= x \oplus y \oplus z \\g(x, y, z) &= (x \wedge y) \vee (\bar{x} \wedge z) \\h(x, y, z) &= (x \vee \bar{y}) \oplus z \\k(x, y, z) &= (x \wedge z) \vee (y \wedge \bar{z}) \\l(x, y, z) &= x \oplus (y \vee \bar{z})\end{aligned}$$

RIPEND-160 の圧縮関数を構成するステップ関数を以下に示す。ただし、 $Z_R(\cdot)$ 、 $Z_L(\cdot)$ でそれぞれ右ライン、左ラインの関数・変数・定数などを表す。**RIPEND-160** は右ラインと左ラインを並列に実行することでハッシュを行う。ステップ関数で用いられる定数 $K_L[j]$ 、 $K_R[j]$ は次のように与えられる。

$$\begin{array}{lll}K_L[j] = 0, & K_R[j] = 0x50a28be6 & (1 \leq j \leq 16) \\K_L[j] = 0x5a27999 & K_R[j] = 0x5c4dd124 & (17 \leq j \leq 32) \\K_L[j] = 0x6ed9eba1 & K_R[j] = 0x6d703ef3 & (33 \leq j \leq 48) \\K_L[j] = 0x8f1bbcdc & K_R[j] = 0x7a6d76e9 & (49 \leq j \leq 64) \\K_L[j] = 0xa953fd4e & K_R[j] = 0 & (65 \leq j \leq 80)\end{array}$$

また、ステップ関数で用いられる左巡回シフト量 $s_L[j]$ 、 $s_R[j]$ は表4のように与えられる。

表 4 左巡回シフトの値

Step Round1	Step Round 2	Step Round 3	Step Round4	Step Round5
Left Right	Left Right	Left Right	Left Right	Left Right
1 11 8	17 7 9	33 11 9	49 11 15	65 9 8
2 14 9	18 6 13	34 13 7	50 12 5	66 15 5
3 15 9	19 8 15	35 6 15	51 14 8	67 5 12
4 12 11	20 13 7	36 7 11	52 15 11	68 11 9
5 5 13	21 11 12	37 14 8	53 14 14	69 6 12
6 8 15	22 9 8	38 9 6	54 15 14	70 8 5
7 7 15	23 7 9	39 13 6	55 9 6	71 13 14
8 9 5	24 15 11	40 15 14	56 8 14	72 12 6
9 11 7	25 7 7	41 14 12	57 9 6	73 5 8
10 13 7	26 12 7	42 8 13	58 14 9	74 12 13
11 14 8	27 15 12	43 13 5	59 5 12	75 13 6
12 15 11	28 9 7	44 6 14	60 6 9	76 14 5
13 6 14	29 11 6	45 5 13	61 8 12	77 11 15
14 7 14	30 7 15	46 12 13	62 6 5	78 8 13
15 9 12	31 13 13	47 7 7	63 5 15	79 5 11
16 8 6	32 12 11	48 5 5	64 12 8	80 6 11

RIPEND-160 のステップ関数は次の通りである .

1 ラウンド($1 \leq j \leq 16$)

$FF_L(A_L, B_L, C_L, D_L, E_L, X[i], s_L[j], K_L[j]) :$

$$A_L = (A_L + f(B_L, C_L, D_L) + X[i] + K_L[j])^{\ll s_L[j]} + E_L, \quad C_L = C_L^{\ll 10}$$

$LL_R(A_R, B_R, C_R, D_R, E_R, X[i], s_R[j], K_R[j]) :$

$$A_R = (A_R + l(B_R, C_R, D_R) + X[i] + K_R[j])^{\ll s_R[j]} + E_R, \quad C_R = C_R^{\ll 10}$$

2 ラウンド($17 \leq j \leq 32$)

$GG_L(A_L, B_L, C_L, D_L, E_L, X[i], s_L[j], K_L[j]) :$

$$A_L = (A_L + g(B_L, C_L, D_L) + X[i] + K_L[j])^{\ll s_L[j]} + E_L, \quad C_L = C_L^{\ll 10}$$

$KK_R(A_R, B_R, C_R, D_R, E_R, X[i], s_R[j], K_R[j]) :$

$$A_R = (A_R + k(B_R, C_R, D_R) + X[i] + K_R[j])^{\ll s_R[j]} + E_R, \quad C_R = C_R^{\ll 10}$$

3 ラウンド($33 \leq j < 48$)

$HH_L(A_L, B_L, C_L, D_L, E_L, X[i], s_L[j], K_L[j]) :$

$$A_L = (A_L + h(B_L, C_L, D_L) + X[i] + K_L[j])^{\ll s_L[j]} + E_L, \quad C_L = C_L^{\ll 10}$$

$HH_R(A_R, B_R, C_R, D_R, E_R, X[i], s_R[j], K_R[j]) :$

$$A_R = (A_R + h(B_R, C_R, D_R) + X[i] + K_R[j])^{\ll s_R[j]} + E_R, \quad C_R = C_R^{\ll 10}$$

4 ラウンド($49 \leq j \leq 64$)

$KK_L(A_L, B_L, C_L, D_L, E_L, X[i], s_L[j], K_L[j]) :$

$$A_L = (A_L + k(B_L, C_L, D_L) + X[i] + K_L[j])^{\ll s_L[j]} + E_L, \quad C_L = C_L^{\ll 10}$$

$GG_R(A_R, B_R, C_R, D_R, E_R, X[i], s_R[j], K_R[j]) :$

$$A_R = (A_R + g(B_R, C_R, D_R) + X[i] + K_R[j])^{\ll s_R[j]} + E_R, \quad C_R = C_R^{\ll 10}$$

5 ラウンド($65 \leq j \leq 80$)

$LL_L(A_L, B_L, C_L, D_L, E_L, X[i], s_L[j], K_L[j]) :$

$$A_L = (A_L + l(B_L, C_L, D_L) + X[i] + K_L[j])^{\ll s_L[j]} + E_L, \quad C_L = C_L^{\ll 10}$$

$FF_R(A_R, B_R, C_R, D_R, E_R, X[i], s_R[j], K_R[j]) :$

$$A_R = (A_R + f(B_R, C_R, D_R) + X[i] + K_R[j])^{\ll s_R[j]} + E_R, \quad C_R = C_R^{\ll 10}$$

3.3.3. 出力

出力は基本的に MD5 同様、最後の段階で求められた連鎖変数の値と初期値 IV を加えた後、(A,B,C,D,E)の 5 つの変数を結合することでハッシュ値を出力するが、2 つのラインを使うため少し違う形で計算される：

$$A = h_2 + C_L + D_R, \quad B = h_3 + D_L + E_R, \quad C = h_4 + E_L + A_R, \\ D = h_5 + A_L + B_R, \quad E = h_1 + B_L + C_R.$$

3.4. SHA-1

SHA-1 は NIST (National Institute of Standard and Technology) により提案された SHA (Secure Hash Algorithm) を改良したハッシュ関数である [N95]。SHA-1 の特徴は入力メッセージをブロック暗号における鍵のように考えて使うところにある。すなわち、入力メッセージを用いて各ステップで新しいメッセージを生成し、それを入力としてステップ関数を作用させる。この新しいメッセージの生成はメッセージ操作に基づく攻撃に耐性を持つと考えられる。SHA-1 は各メッセージブロックに対し 4 ラウンド 80 ステップの演算を行い、160 ビットのハッシュ値を出力する。

3.4.1. 入力

入力メッセージは Big-endian 方式により 32 ビットに変換され、512 ビットのブロックに分けられる。メッセージブロック $X = (X[0], X[1], \dots, X[15])$ を用いて次の式

$$X[j] = (X[j-3] \oplus X[j-8] \oplus X[j-14] \oplus X[j-16]) \ll 1 \quad (16 \leq j \leq 79)$$

により新しい $X[16], X[17], \dots, X[79]$ を生成する。したがって、 $(X[0], X[1], \dots, X[79])$ が圧縮関数の入力として用いられる。

3.4.2. 圧縮関数

圧縮関数の計算には 5 つの連鎖変数 (A,B,C,D,E) を用いる。A,B,C,D の初期値は MD5 と同じ値であり、新しく E の初期値が定められている。(A,B,C,D,E)の初期値 $IV = (h_1, h_2, h_3, h_4, h_5)$ を以下に示す。

$h_1 = 0x67452301$, $h_2 = 0xefcdab89$, $h_3 = 0x98badcfe$, $h_4 = 0x10325476$, $h_5 = 0xc3d2e1f0$

SHA-1 の圧縮関数で使われるブール関数はステップ t に対し次のように定義されている .

$$\begin{aligned}f^{(t)}(x, y, z) &= (x \wedge y) \vee (\bar{x} \wedge z) & (1 \leq t \leq 20) \\f^{(t)}(x, y, z) &= x \oplus y \oplus z & (21 \leq t \leq 40) \\f^{(t)}(x, y, z) &= (x \wedge y) \vee (x \wedge z) \vee (y \wedge z) & (41 \leq t \leq 60) \\f^{(t)}(x, y, z) &= x \oplus y \oplus z & (61 \leq t \leq 80)\end{aligned}$$

ステップ関数は次のように設計されている .

$$A = A^{\ll 5} + f^{(t)}(B, C, D) + E + X[j] + K^{(t)}; \quad E = D; \quad D = C; \quad C = B^{\ll 30}; \quad B = A;$$

ただし , $1 \leq t \leq 80$, $0 \leq j \leq 79$ である . また , 定数 $K^{(t)}$ の値としては次の値を用いる .

$$\begin{aligned}K^{(t)} &= 0x5a827999 & (1 \leq t \leq 20) \\K^{(t)} &= 0x6ed9eba1 & (21 \leq t \leq 40) \\K^{(t)} &= 0x8f1bbcdc & (41 \leq t \leq 60) \\K^{(t)} &= 0xca62c1d6 & (61 \leq t \leq 80)\end{aligned}$$

3.4.3. 出力

MD5 同様圧縮関数で求められた値と初期値 IV を加算した後 , 5 つの変数 (A,B,C,D,E) の結合により 160 ビットのハッシュ値を出力する .

3.5. MD5, RIPEMD-160, SHA-1 の構造の比較

MD5, RIPEMD-160, SHA-1 の圧縮関数に用いられている各構成要素をラウンド数・ブール関数・入力の仕方に分けて比較し,まとめる.

表 5 用いられるブール関数の種類

ブール関数の種類	MD5	RIPEMD-160	SHA-1
$f(x, y, z) = (x \wedge y) \vee (\bar{x} \wedge z)$			
$g(x, y, z) = (x \wedge z) \vee (y \wedge \bar{z})$			$(x \wedge y) \vee (x \wedge z) \vee (y \wedge z)$ *
$h(x, y, z) = x \oplus y \oplus z$			
$i(x, y, z) = y \oplus (x \vee \bar{z})$		$x \oplus (y \vee \bar{z})$ **	--
$j(x, y, z) = (x \vee \bar{y}) \oplus z$	--		--

(:ブール関数が用いられている.

-- :ブール関数が用いられていない.

* :MD5 の $g(x,y,z)$ の代わりに用いられるブール関数.

** :MD5 の $i(x,y,z)$ の代わりに用いられるブール関数.)

表 6 ハッシュ関数の各パラメータの比較

	MD5	RIPEMD-160	SHA-1
ラウンド数 (ステップ数)	5 (64)	5×2 * (80×2) *	4 (80)
入力ブロックの サイズ(bit)	512	512	512
出力サイズ(bit)	128	160	160
入力の変換方式	Little-endian	Little-endian	Big-endian
各ステップでの 入力の仕方	表 1 で定義された 順に入力	表 3 で定義された 順に入力	メッセージを拡張
左巡回シフト量	表 2 で定義	表 4 とステップ 関数内で定義	ステップ関数内で 定義

(* : 右ラインと左ラインの両方でステップ関数を行うため,実際は2倍のラウンド数を必要とする.)

4. 安全性評価

一般に、暗号系は適当な仮定の下でその安全性が証明されていることが望ましいが、(実用的な)ハッシュ関数の場合は共通鍵暗号の場合と同様その安全性を理論的に証明することは困難である。したがってハッシュ関数の安全性は、既存の攻撃に対して耐性を持つか否かによって評価されている。そこで本章では、ハッシュ関数に対する体系的な攻撃について述べた後、MD5、SHA-1、RIPEMD-160 に対する攻撃を紹介し、それらの攻撃に対する各ハッシュ関数の強度評価について述べる。

4.1. ハッシュ関数に対する主な攻撃

すでに述べたように、安全なハッシュ関数はその Preimage や 2nd preimage、さらに衝突(Collision)を求めることが困難でなければならない。したがって、もしこれらを実際に求める方法を与えることができれば、それがハッシュ関数に対する攻撃となる。標準的なハッシュ関数に対する攻撃としては、

- (1) アルゴリズムと独立の攻撃
- (2) 圧縮関数に対する攻撃
- (3) 連鎖に基づいた攻撃(Chaining attacks)

が挙げられる。まずこの3つの攻撃について簡単に説明する。

4.1.1. アルゴリズムと独立の攻撃

以下で説明する攻撃は、ハッシュ関数(アルゴリズム)の構造にはよらない素朴な全数探索的な攻撃である。これらの攻撃において各ハッシュ関数は、出力ビット長および1回の演算に要する時間のみによって特徴付けられるブラックボックスとして扱われる。したがって、これらはすべてのハッシュ関数に対して適用可能であり、それゆえハッシュ関数の安全性の基準を与える。すなわち、ハッシュ関数に対するある攻撃が、以下に述べる攻撃と同程度の計算を必要とする場合、ハッシュ関数はその攻撃に対して安全であるとみなされる。

(1) ランダム攻撃

ランダム攻撃は、Preimage、や 2nd preimage を全数探索により求める攻撃である。(衝突は、以下で述べるバースデー攻撃によりさらに効率的に求めることができる。)攻撃者は、あるメッセージ X のハッシュ値 $H(X)$ に対し、別のメッセージ \tilde{X}

をランダムに選び，そのハッシュ値が $H(X) = H(\tilde{X})$ となることを期待する．ハッシュ値を一様な n ビットのランダム変数と仮定した場合，この攻撃は 2^{-n} の成功確率を持つ．

(2) バースデー攻撃

バースデー攻撃は，バースデーパラドクスを利用して全数探索よりも効率的に衝突 (Collision) を求める攻撃である．ここでハッシュ値を一様なランダム変数と仮定した場合，衝突発見のためには $O(2^{n/2})$ の計算が必要である．この攻撃はアルゴリズムと独立な攻撃であるため，これより効率的な (衝突を求める) 攻撃が見つからない場合，ハッシュ関数は衝突困難であるとみなされる．

4.1.2. 圧縮関数に対する攻撃

圧縮関数に対する攻撃の目標は，あるステップ i で preimage, pseudo-preimage, 2nd-preimage, collision, pseudo-collision を探索する方法を与えることである．圧縮関数に対する攻撃が重要な理由は，多くの場合，ハッシュ関数の全体の安全性は，その圧縮関数の安全性に強く依存するからである．以下では，ハッシュ関数の圧縮関数を $H(\cdot)$ ，異なる 2 つのメッセージを X および \tilde{X} ，ある与えられたハッシュ値を Y とあらしめることにする．また， V と \tilde{V} はそれぞれ X と \tilde{X} を入力とする圧縮関数で用いられる初期値 IV の適当な値とする． X_0, V_0 はそれぞれある与えられた入力，初期値とする．

(1) Preimage

Preimage を発見するということは

$$H(V_0, X) = Y$$

となる X を探すことである．すなわち，ハッシュ値が与えられた時，そのハッシュ値からメッセージを探し出すことである．

(2) Pseudo-preimage

Pseudo-preimage の探索とは

$$H(V, X) = Y$$

を満たす V と X を計算することである．すなわち，与えられたハッシュ値からランダムな初期値と入力メッセージを計算する攻撃である．

(3) 2nd preimage

2nd preimage の探索とは

$$H(V_0, \tilde{X}) = H(V_0, X_0)$$

となる \tilde{X} を計算することである。ある入力メッセージが与えられた時、それと同じハッシュ値を持つ異なるメッセージを探す攻撃である。

(4) 衝突 (Collision)

一般に衝突とは、異なる 2 つのメッセージが同じハッシュ値を持つことである。衝突には固定された IV に対する衝突と適当な IV に対する衝突が考えられる。固定 IV に対する衝突とは

$$H(V_0, X) = H(V_0, \tilde{X})$$

を満たす X と \tilde{X} を探すことである。すなわち、圧縮関数のアルゴリズムの中で与えられた初期値を用いて 2 つの異なるメッセージ X と \tilde{X} を探すことである。一方、ランダムな IV に対する衝突とは

$$H(V, X) = H(V, \tilde{X})$$

を満たす X , \tilde{X} , V を計算することである。これは攻撃者によりランダムに選ばれた初期値を用いて異なる 2 つのメッセージ X と \tilde{X} を計算することである。通常、単に衝突といえば前者を指す。

(5) 擬似衝突 (Pseudo-collision)

擬似衝突とは

$$H(V, X) = H(\tilde{V}, \tilde{X})$$

を満たす X , \tilde{X} , V , \tilde{V} を計算することである。すなわち、同じハッシュ値を出力する異なる 2 つの初期値と入力の対を求める攻撃である。

4.1.3. 連鎖に基づいた攻撃(Chaining attacks)

ここでは連鎖変数を用いる繰り返しハッシュ関数の特徴に基づく攻撃について述べる。メッセージは m 個のブロックに分けられてハッシュ関数に入力されるとする。 m 個のブロックの中から 1 つを選んで別の値のブロックに替えても同じハッシュ

値を出力するようなブロックを発見することが連鎖に基づいた攻撃の目標である。したがって、連鎖に基づいた攻撃の焦点は、ハッシュ関数全体ではなく、むしろその圧縮関数にある。以下に、代表的な連鎖攻撃をいくつか挙げる。

(1) Correcting-block chaining attacks

与えられたメッセージに対して、その値を別の値に置き換えてもハッシュ値が変わらないようなブロックを探索する攻撃である。この攻撃は *Preimage* や *Collision* の発見に使われる。

(2) Meet-in-the-middle chaining attacks

ハッシュ関数の途中の値に対する衝突を探す方式であり、与えられたハッシュ値に対するメッセージを探索する攻撃である。攻撃者は、ある位置でメッセージブロックをアルゴリズムで定義されている初期値により前方向にハッシュし、与えられたハッシュ値により後方向にハッシュしながらその位置における連鎖変数の衝突をさがす。この攻撃を行うために攻撃者は連鎖において後方向にも効率よく計算できる必要がある。

(3) Fixed-point chaining attacks

メッセージに任意のブロックを挿入しても全体のハッシュ値が変わらない位置を発見することにより、ハッシュ関数に対する *2nd preimage* や *collision* を検索する攻撃である。

(4) Differential chaining attacks

差分攻撃はブロック暗号において効率のよい攻撃法として知られているが、同時にハッシュ関数においても強力な攻撃となる。この攻撃は入力差分と出力差分を比較することにより行われる。特に、ある入力差分に対し出力差分が 0 になると衝突が起こるものとする。

4.2. MDx 族ハッシュ関数への攻撃

MDx 族ハッシュ関数に対する攻撃は主に圧縮関数に関する攻撃である。特にハッシュ関数のアルゴリズムの中で用いられる初期値に対する衝突の探索が実用的な攻撃として重要である。MDx 族ハッシュ関数に対する攻撃には 4.1.2 の圧縮関数に対する攻撃と 4.1.3 の連鎖に基づいた攻撃により行われる。

4.2.1. MD4 に対する攻撃

(1) 2 - 3 ラウンドに対する攻撃

Boer と Bosselaers により提案された MD4 に対する攻撃であり、仮に計算が圧縮関数の第 1 ラウンドを省略した 2 - 3 ラウンドに対する攻撃である [BB91]。2 ラウンドの 5 ステップから 13 ステップに入力される $X[1]$, $X[5]$, $X[9]$, $X[13]$, $X[6]$, $X[10]$ は 3 ラウンドのステップ 21 からステップ 29 の間でも異なる順番ではあるが、入力として用いられることに着目し、同じハッシュ値を出力する入力と連鎖変数の値を探索する攻撃である。衝突の探索のために計算しなければならない未知数は

(A_5, B_5, C_5, D_5) の値

(A_9, B_9, C_9, D_9) に対する 2 つの値

$(A_{13}, B_{13}, C_{13}, D_{13})$ の値

$(A_{21}, B_{21}, C_{21}, D_{21})$ の値

$(A_{25}, B_{25}, C_{25}, D_{25})$ に対する 2 つの値

$(A_{29}, B_{29}, C_{29}, D_{29})$ の値

$X[2], X[6], X[10], X[14], X[1], X[5], X[9], X[13]$ に対する 2 つの値

の 48 個である。この未知数を計算するために

(a) (A, B, C, D) の最終的な値

(b) $(A_{17}, B_{17}, C_{17}, D_{17})$ の値

(c) $X[0], X[4], X[8], X[12], X[3], X[7], X[11], X[15]$ の値

の 16 個の未知数を持つ 16 個の式を考える。また、 $N = 0x55555555$ と定め、 N の奇数の位置は 0、偶数の位置は 1 とする。 N を奇数ビット巡回シフトするとその値は $2N$ になるという特徴を用いて X を計算し、その値と一致する初期値 (A, B, C, D) を探す。次に 16 個の与えられた式を満たす入力として 2 つの $X[1], X[2], X[5], X[10], X[13], X[14]$ を選んだ後、 $X[6], X[9]$ を選ぶ。

このプロセスにより求められた 2 つのメッセージ間の差分はいつも

$$0 \quad -2N \quad 2N \quad 0 \quad 0 \quad -2N \quad 2N \quad 0 \quad 0 \quad -N \quad N \quad 0 \quad 0 \quad -N \quad N \quad 0$$

となる。この攻撃は 16 MHz IBM PS/2 で衝突が発見するのに 1 ms を要することが報告されている。

(2) Almost Collision

Vaudenay は MD4 の圧縮関数の構造と入力順番を考慮すると Almost Collision を発見できることを示した [V95]。この攻撃も (1) と同様入力が単純であることを利用した攻撃である。 $X[15]$ の値を変えて 1、2 ラウンドで用いると 2 ラウンドの終わりでは連鎖変数 (A, B, C, D) の中で B の値だけが変わることを、すなわち、 $X[15]$ の値を変えることで一部だけ値の異なるハッシュ値が得られることを示した。Almost Collision の存在は Collision の探索に有用であると考えられ、実際に MD4 の全段階における攻撃 [Dob96a] と MD5 に対する攻撃 [Dob96b] にも利用されている。

(3) 全ラウンドに対する攻撃

Dobbertin により提案された MD4 の全段階に対する攻撃が 1996 年に発表された [Dob96a]。連鎖変数に基づいた攻撃や Almost Collision, 差分攻撃などの様々な攻撃法を用いて構成されている。この攻撃は

ステップ 13 - 20 間の Almost Collision

ステップ 21 - 36 間の法 2^{32} での差分攻撃

ステップ 1 - 12 間での正しい初期値に対する衝突

の 3 つの部分に構成されている。

$X[12]$ を選びステップ 13 - 20間の Almost Collision を探索するため，ステップ 20での出力差分 Δ_{20} が

$$\Delta_{20} = (0, 1^{\ll 25}, -1^{\ll 5}, 0)$$

となる X と \tilde{X} を探す． X と \tilde{X} はステップ 13から20の間，差分が Δ_{20} である

Almost Collisionである．次に $X = (X[0], X[1], \dots, X[15])$ と $\tilde{X} = (\tilde{X}[0], \tilde{X}[1], \dots, \tilde{X}[15])$ を

$$\begin{aligned} X[i] &= \tilde{X}[i] \quad (i \neq 12) \\ X[j] &= \tilde{X}[j] + 1 \quad (j = 12) \end{aligned}$$

とし，ステップ 36での出力差分 Δ_{36} が0になるような X と \tilde{X} を計算する．

[定理 1] Almost Collision の条件を満たすようにステップ 13からステップ 20までの入力を探した後，他の入力を探すためにランダムに $X[i]$ を選び，ステップ 12からステップ 1まで後方向に圧縮を行う．ここで

$$(A_{12}, B_{12}, C_{12}, D_{12}) = (A, B, C, D)$$

とすると $\Delta_{36} = 0$ になる X と \tilde{X} を探す確率は 2^{-22} である．

差分攻撃の後，連鎖変数 (A, B, C, D) の初期値としてアルゴリズムで与えられた値を用いて，ステップ 1から12まで用いられている入力の中で一部を直す．

Dobbertinはこの攻撃で実際は 2^{22} の計算量以内で衝突が発見出来ることを示した．

4.2.2. MD5に対する攻撃

MD4の2 - 3ラウンドに対する攻撃が発表された後，その攻撃から分かった弱点を改良したハッシュ関数として提案されたのがMD5である．その改良点はMD5のアルゴリズムのところで述べている．しかし，この改良にも関わらずMD5に対する攻撃はいくつか発表されている．

(1) 1 - 2ラウンドに対する攻撃

BoerとBosselaersにより提案されたMD5に対する攻撃は，連鎖変数 (A, B, C, D) の初期値 $IV = (h_1, h_2, h_3, h_4)$ と4ビット異なる値を初期値として用いることで擬似

衝突を探索する攻撃である[BB93] .

この攻撃のため, まず, MSB が 1 になる (A,B,C,D) をランダムに生成する. 圧縮関数の各ステップで連鎖変数の値が F8000000 になるよう $X = (X[0], X[1], \dots, X[15])$ を選ぶ. 選ばれた X が 1, 2 ラウンドにおいて有効な選択であるかを MSB の値が 1 であるかで判断する. 1 ラウンドのステップ i で MSB が 1 でない場合, $X[i-1]$ をステップ i での巡回シフト量によりシフトした値が採用される (巡回シフト量は表 2 を参照). この値を 2 ラウンドで用い, 他のステップの MSB に変化が生じるかを調べる. 変化が生じた場合, 各ステップで計算される変数の値が F8000000 に近似するようにメッセージの他の部分を変える.

Boer と Bosselaers は圧縮関数に対する擬似衝突を 2^{16} の操作で発見できることを示した. この攻撃は擬似衝突(Pseudo-Collision)を与えるが, 連鎖変数の固定された初期値に対する衝突の発見まで拡張できないため, 実用的な攻撃とはみなされていない.

(2) MD5 の全ラウンドに対する攻撃

1996 年 MD5 に関する衝突例が Dobbertin により発表された[Dob96b]. Dobbertin の攻撃は初期値を適当に選ぶことによって $X[14]$ における衝突を与える. まず $X[i]$ と $\tilde{X}[i]$ だけが異なり, 他のすべてが同一のメッセージ X と \tilde{X} の対を考える. 小さなハミング重み Δ を選び, 次式が成り立つとする.

$$\tilde{X}[i] = X[i] + \Delta$$

ここで特に $i=14$ の場合を考える. この時表 1 により $X[14]$ と $\tilde{X}[14]$ は 1 ラウンドの 15 ステップ, 2 ラウンドの 26 ステップ, 3 ラウンドの 36 ステップ, 4 ラウンドの 51 ステップで使われることがわかる. 攻撃のため注意して考察しなければならない部分は

- (a) 15 ステップから 26 ステップの間と
- (b) 36 ステップから 51 ステップの間

の演算である. X と \tilde{X} に対する圧縮関数は 14 ステップまで一緒である. $X[14]$ と $\tilde{X}[14]$ が入力として用いられるステップ 15, すなわち, (a) の始まり部分で最初

の誤差が起こる．もし (a) に対して $X[14]$ と $\tilde{X}[14]$ が 2 回目に使われるステップ 26 で連鎖変数の値を一致させることが出来れば，これを部分 (a) の内部衝突と呼ぶ．(a) 以降から $X[14]$ と $\tilde{X}[14]$ は用いられないので X と \tilde{X} に対する圧縮関数はステップ 27 から 35 まではまた同じである．その後，2つの入力 X と \tilde{X} に対し圧縮関数が同じ出力をもつために部分 (b) の内部衝突を必要とする．Dobbertin はこの方式で Pentium PC で 10 時間ぐらいで衝突を発見できることを示している．彼は MD5 に対する完全な攻撃は

ラウンド 1 - 2 における内部衝突
 ラウンド 3 - 4 における内部衝突
 これら 2 つの内部衝突を結ぶ

の 3 部分で構成されると主張している．ステップ関数の定義に基づいて内部衝突を方程式系で表すことで と を解決できると考えられる．しかし，MD5 の完全な解読のためにはさらに複雑な演算が必要されたと考えられている．

4.2.3. RIPEMD-160 に対する攻撃

RIPEMD-160 の前のバージョンである RIPEMD の 1 ラウンドまたは 3 ラウンドを省略した圧縮関数に対する攻撃は

- (a) 内部衝突
- (b) 後方向衝突
- (c) RIPEMD の初期値による衝突

の 3 つの部分で構成されている．内部衝突の探索のため，

$$\begin{aligned} X[i_0] &\neq \tilde{X}[i_0], \\ X[i] &= \tilde{X}[i] \quad \text{for } i \neq i_0 \end{aligned}$$

となる異なる 2 つのメッセージ X , \tilde{X} を探索する．この内部衝突が見つかり 2 ラウンドでの衝突を探索するため， $X[i_0]$ が用いられるステップ以外で使われる連鎖変数の値をステップ $(i_0 - 1)$ 以降では同じ値になるように決める．この部分を後方

向衝突と呼ぶ。後方向衝突は、ある位置を中心に前後方向でステップ関数を作用させるので Meet-in-the-middle attack を用いている。

後方向衝突の段階ではランダムに生成される初期値を用いるが、それをアルゴリズムで与えられた値に固定して衝突を探索する。この攻撃によると最初のラウンドまたは最後のラウンドを省略した時、 2^{31} 以内の計算で衝突を発見することができることが報告されている[Dob97]。この攻撃は左右2つのラインの入力パターンや左巡回シフト量などが同じであるため可能だと考えられる。この攻撃が可能なのは RIPEMD の左右2つのラインのプロセスが定数以外はまったく同一であるためである。したがってこの攻撃に対して耐性を持たせるためには2つのラインのプロセスを独立にする必要がある。RIPEMD に対して左右ラインのプロセスを違いに独立にし、さらにラウンド数を5に拡張することにより安全性を高めたのが RIPEMD-160 である。RIPEMD から RIPEMD-160 への改良点を以下に具体的に挙げる。

- (1) ラウンド数を3ラウンドから5ラウンドに増やした。
- (2) 並列の左右ラインアルゴリズムを独立に設計した。
- (3) 左右ライン異なるメッセージの入力順序を用いた：1 - 2ラウンドで近い位置にあった入力は2 - 3ラウンドでは離れるように設計されている。また、左ラインで隣接している2つの入力は右ラインでは少なくとも7距離れるようにしている。
- (4) MD5と同じブール関数を用いた。
- (5) 左右ラインで用いられるブール関数の適用順序を逆にした。

また、安全性向上のため、左巡回シフト量の決定において以下の法則を用いている。

- (a) シフト量は5から15間の値とする。
- (b) 各メッセージブロックは異なる量でシフトされ、異なるパリティを持つようになる。
- (c) 各連鎖変数に用いられるシフトは特別なパターンを持たない。
- (d) 多くのシフト定数が4により分けられては行けない。

これらは RIPEMD, MD4 に対する攻撃を考慮した改良であるため、MD4, RIPEMD に対する攻撃は RIPEMD-160 には適用できず、実際、パースデー攻撃より効率的な RIPEMD-160 に対する攻撃はまだ報告されていない。

4.2.4. SHA-1 に対する攻撃

MD5 や RIPEMD-160 がその前のバージョンに対する攻撃に基づき、改良されたことに比べ、以前のバージョンの攻撃が発表する前に改良されたハッシュ関数が SHA-1 である。SHA-1 のアルゴリズムで示したように SHA も SHA-1 も圧縮関数の解析のためにはステップ関数だけでなく、入力メッセージを拡張する部分も分析しなければならない。そのため、MD4、MD5、RIPEMD への攻撃は SHA、SHA-1 には適用できない。

SHA に対する攻撃は 1998 年に Chabaud と Joux によりはじめて報告された[CJ98]。この攻撃は出力差分が 0 になるメッセージ X と \tilde{X} を探すため、入力に対する特性マスクを探す差分攻撃である。SHA は入力として $X=(X[0],X[1],\dots,X[15])$ を用いて

$$X[j] = (X[j-3] \oplus X[j-8] \oplus X[j-14] \oplus X[j-16]) \quad (16 \leq j \leq 79)$$

によりメッセージを $(X[0],X[1],\dots,X[79])$ に拡張する。そこで、 $M=(M[0], M[1],\dots, M[79])$ とする差分マスクを考える。この差分マスクは、例えば、 $X=(X[0],X[1],\dots,X[15])$ に対し $\tilde{X} = X \oplus M$ が同じ値を出力するように構成される。この差分マスクを特性マスクと呼ぶ。すなわち、Chabaud と Joux による SHA に対する攻撃とはメッセージ X に対する特性マスク M の探索により \tilde{X} が計算できることを示したことである。

この攻撃を用いると 2^{61} の計算で衝突を発見できるため、パースデー攻撃より効率的な攻撃として考えられる。しかし、SHA に対する攻撃はメッセージ拡張の部分で 1 ビットの左巡回シフトを用いる SHA-1 には適用できないため、これは SHA-1 に対する実用的な攻撃ではない(2.4.1 節 SHA-1 の入力参照)[CJ98]。この入力拡張部分の 1 ビット左巡回の利用することにより SHA で線形であった入力を非線形にすることができるためその解析が難しくなる。SHA-1 に対する攻撃ではこの入力の 1 ビット巡回シフトを解析することが非常に重要なこととなり、この解析が行われな限り SHA-1 の圧縮関数に対する攻撃も困難である。現在、パースデー攻撃より効率のよい SHA-1 に対する実用的な攻撃はまだ報告されていない。

4.2.5. MDx 族ハッシュ関数に対する攻撃の比較

一般に、実用的なハッシュ関数の安全性を理論的に証明することは困難であり、通常既存の攻撃に対して耐性を持つか否かによってその安全性が評価される。したがって本報告書においても、MD5、RIPEMD-160、SHA-1 の安全性について、既存の攻撃が適用可能かという点から評価した。各ハッシュ関数に対する理想的な安全性(全数探索的攻撃に要する計算量)を表 7 で示し、実際の安全性との比較を行う。

結論から述べると、MD5、RIPEMD-160、SHA-1 は既存の実用的な攻撃に対し

て安全である（表 8，9）．表 8 は MD5，RIPEMD-160，SHA-1 の圧縮関数に対する代表的な攻撃の成否及びその攻撃のために必要な計算量を示している．表から明らかなように RIPEMD-160，SHA-1 に関しては有効な攻撃は知られていない．MD5 に関しては，初期値可変の場合の衝突および擬衝突が発見されているが，これらの発見が直ちに有効な攻撃に結びつくわけではなく，実際の安全性の観点からは問題ないと考えられている．表 9 は，上記 3 つのハッシュ関数およびその前バージョンである MD4，RIPEMD，SHA の衝突の探索に必要な計算量を示している．上段のバースデー攻撃は，すべてのハッシュ関数に対して適用可能な全数探索的な攻撃であり，これよりも効率的な攻撃が存在しない時そのハッシュ関数は安全（衝突困難）であるみなされる．MD4，RIPEMD，SHA に関してはバースデー攻撃よりも効率的な攻撃が存在するが，MD5，RIPEMD-160，SHA-1 に関してはそのような攻撃は報告されておらず，現在のところ安全であると考えられている．

以上述べたように，MD5，RIPEMD-160，SHA-1 に対する実用的な攻撃は知られていない．したがって，これらのハッシュ関数を実際に用いる際には，全数探索的な攻撃に対する安全性を確保しておけば十分であると考えられる．現在，ハッシュ値の長さは 160 ビット程度必要であると考えられているが，最近の計算機や攻撃法の発達を考慮して，さらに長い出力をもつハッシュ関数も提案されている[N00]．

表 7 MD5,RIPEMD-160,SHA-1 の理想的な強度

攻撃の種類	MD5	RIPEMD-160	SHA-1
Preimage	2^{128}	2^{160}	2^{160}
2 nd preimage	2^{128}	2^{160}	2^{160}
Collision	2^{64}	2^{80}	2^{80}

表 8 MD5, RIPEMD-160, SHA-1 の圧縮関数への攻撃の種類と攻撃に必要な計算量

攻撃の種類	MD5	RIPEMD-160	SHA-1
Preimage	--	--	--
2 nd preimage	--	--	--

Collision (fixed IV)	--	--	--
Collision (random IV)	[Dob96c]	--	--
Pseudo-collision	[BB93]	--	--

(-- :攻撃が発見されていないことを示す .

[Dob96c] : MD5 の全段階 (4 ラウンド) に対する攻撃(3.2.2 節を参照).

Pentium PC で約 10 時間ぐらいで衝突を探索出来る .

[BB93] : 1 - 2 ラウンドに対する攻撃(3.2.2 節を参照)

2^{16} の計算量が必要である.)

表 9 固定された初期値に対する衝突の探索に必要な計算量の比較

ハッシュ関数 攻撃	MD4	MD5	RIPEND	RIPEND-1 60	SHA	SHA-1
バースデー 攻撃	2^{64}	2^{64}	2^{64}	2^{80}	2^{80}	2^{80}
圧縮関数に 対する攻撃	2^{22}	--	2^{31}	--	2^{61}	--

(* MD4 の圧縮関数に対する攻撃は Dobbertin の全段階に対する攻撃である[Dob96a] .

* RIPEND の圧縮関数に対する攻撃は 2 - 3 ラウンドに対する攻撃である[Dob97] .

* SHA の圧縮関数に対する攻撃は全段階に対する攻撃である[CJ98] .

* --はバースデー攻撃よりいい衝突探索方法がまだ見つからないことを示している .)

5 . 終わりに

本報告書では実用的なハッシュ関数として現在暗号分野で用いられている MD5, RIPEMD-160, SHA-1 について,その構造の説明,それらの構成要素の比較,及び各ハッシュ関数の安全性の調査を行った.

参考文献

[AB96] R.Anderson and E.Biham, "Tiger : A new hash function," Fast Software Encryption, Lecture Notes in Computer Science, Springer-Verlag, pp.89-97, 1996.

[BB91] B.den Boer and A.Bosselaers, "An attack on the last two rounds of MD4," Advances in Cryptology-Crypto'91, Lecture Notes in Computer Science, Springer-Verlag, pp.194-203, 1991.

[BB93] B.den Boer and A.Bosselaers, "An attack on the last two rounds of MD5", Advances in Cryptology-Eurocrypt'93, Springer-Verlag, pp. 293-304 , 1993.

[BD92] F.Bauspiess and F.Damm, "Requirements for Cryptographic Hash Functions," Computers & Security, 11, pp.427-437, 1992.

[BGR95] M.Bellare, R.Guerin, and P.Rogaway, "XOR MACs:New Methods for Message Authentication Using Finite Pseudorandom Functions," Advances in Cryptology-Crypto'95, Lecture Notes in Computer Science, Springer-Verlag, pp.15-28,1995.

[BGV96] A.Bosselaers, R.Govaerts, and J.Vandewalle, "Fast Hashing on the Pentium",Advances in Cryptology-Crypto'96, Lecture Notes in Computer Science, Springer-Verlag, pp.298-312 , 1996.

[BGV97] A.Bosselaers, R.Govaerts, and J.Vandewalle, "SHA: A Design for parallel Architectures?", *Advances in Cryptology-Eurocrypt'97, Lecture Notes in Computer Science*, Springer-Verlag, pp.348-362, 1997.

[BJKS93] J.Bierbrauer, T.Johansson, G.Kabatiansukii, and B.Smeets, "On Families of Hash Functions via Geometric Codes and Concatenation," *Advances in Cryptology-Crypto'93, Lecture Notes in Computer Science*, Springer-Verlag, pp.331-342, 1993.

[BKR94] M.Bellare, J.Kilian, and P.Rogaway, "The security of cipher blocks chaining," *Advances in Cryptology-Crypto'94, Lecture Notes in Computer Science*, Springer-Verlag, pp.341-358, 1994.

[BM97] M.Bellare, and D.Micciancio, "A New Paradigm for Collision-Free Hashing: Incrementality at Reduced Cost," *Advances in Cryptology-EuroCRYPTO'97, Lecture Notes in Computer Science*, Springer-Verlag, pp.163-192, 1997.

[BR97] M.Bellare, and P.Rogaway, "Collision-Resistant Hashing: Towards Making UOWHFs Practical," *Advances in Cryptology-Crypto'97, Lecture Notes in Computer Science*, Springer-Verlag, pp.470-484, 1997.

[BS91] E.Biham and A.Shamir, "Differential Cryptanalysis of DES-like Cryptosystems," *Journal of Cryptology*, 4(1): pp.3-72, 1991.

[CJ98] F.Chabaud, and A.Joux, "Differential collisions in SHA-0 ", *Advances in Cryptology-Crypto'98, Lecture Notes in Computer Science*, Springer-Verlag , pp.56-71 , 1998.

[D89] I.B.Damgard, "A Design Principle for Hash Functions ", *Advances in Cryptology-Crypto'89, Lecture Notes in Computer Science*, Springer-Verlag, pp.416-427, 1989.

[DBP96] H.Dobbertin, A.Bosselaers, B.Preneel, "RIPEMD-160: A strengthened version of RIPEMD," *Fast Software Encryption-cambridge Workshop, LNCS vol.1039*, Springer-Verlag, pp.71-82, 1996.

[DGV92] J.Daemen, R.Govaerts, and J.Vandewalle, "A Framework for the Design of One-Way Hash Function Including Cryptanalysis of Damgard's One-Way Function Based on a Cellular Automaton", Advances in Cryptology-ASIACRYPT'91, Springer-Verlag, pp.82-96, 1992.

[Dob96a] H.Dobbertin, "Cryptanalysis of MD4", Fast Software Encryption, LNCS1039, Springer-Verlag, pp.53-69, 1996.

[Dob96b] H.Dobbertin, "The status of MD5 after recent attack", CryptoBytes, 2(2), Sep., pp.1-6, 1996.

[Dob96c] H.Dobbertin, "Cryptanalysis of MD5 compress," Presented at the rump session of Eurocrypt'96, May 14, 1996.

[Dob97] Hans Dobbertin: "RIPEMD with Two-Round Compress Function is Not Collision-Free." Journal of Cryptology 10(1): 51-70, 1997.

[Dob98] H.Dobbertin, "The First Two Rounds of MD4 Are Not One-Way," Fast Software Encryption, Springer-Verlag, pp.284-292, LNCS1372, Springer-Verlag, 1998.

[MOV97] A.Menezes, P.C.van Oorschot, and S.A.Vanstone, "Handbook of Applied Cryptography," CRC press, 1997.

[MZI98] M.Mihaljevic, Y.Zheng and H.Imai, "A Fast One-way Hash Function Based on Linear Cellular Automata over $GF(q)$ ", Proceeding of Symposium on Cryptography and Information Security(SCIS)'98-6.1.D. 1998.

[MZI99] M.Mihaljevic, Y.Zheng and H.Imai, "A Family of Fast Dedicated One-Way Hash Functions Based on Linear Cellular Automata over $GF(q)$," IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, Vol.E82-A, No.1, pp.40-47, Jan. 1999.

[N93] NIST, "Secure hash standard," FIPS 180-1, US Department of Commerce, Washington D.C., 1993.

[N00] NIST, "New hash algorithms (SHA-256, SHA-384, and SHA-512)," <http://csrc.nist.gov/cryptval/shs.html>

[NKC94] S.Nandi, B.K.Kar, and P.P.Chaudhuri, "Theory and applications of cellular automata in cryptography," IEEE Transactions on computers, vol. 43, no.12, pp.1346-1357, December, 1994.

[PGV93] B.Preneel, R.Govaerts, and Vandewalle, "Hash functions based on block ciphers: a synthetic approach," Advances in cryptology - Crypto 93, LNCS vol.773, pp.368-378, 1994.

[PO95] B.Preneel, P.C.van Oorschot, "MDx-MAC and building fast MACs from hash functions," Advances in Cryptology-Crypto'95, Lecture Notes in Computer Science, Springer-Verlag, pp.1-4,1995.

[PQ98] J.Pieprzyk, and C.X.Qu, "Rotation-Symmetric Functions and Fast Hashing," Information Security and Privacy, Lecture Notes in Computer Science No.1438, Springer-Verlag, pp.169-180, 1998.

[R92a] R.Rivest, "The MD4 message-digest algorithm," Request For Comments(RFC) 1320, Internet Activities Board, Internet Privacy Task Force, April. 1992.

[R92b] R.Rivest, "The MD5 message-digest algorithm," Request For Comments(RFC) 1321, Internet Activities Board, Internet Privacy Task Force, April 1992 (<http://www.roxen.com/rfc/rfc1321.html>).

[S98] D.R.Simon, "Finding collisions on a one-way street: can secure hash functions be based on general assumptions?," Advances in Cryptology-Eurocrypt'98, Springer-Verlag, pp.334-345, 1998.

[SV94] C.P.Schnorr, and S.Vaudenay, "Black box cryptanalysis of hash networks based on multipermutations," Advances in Cryptology-Eurocrypt'94, Springer-Verlag, pp.47-57, 1994.

[SV98] C.P.Schnorr, and S.Vaudenay, "The black-box model for cryptographic primitives," *Journal of Cryptology* 11(2), 125-140 ,1998.

[V95] S.Vaudenay, "On the need for multipermutations: cryptanalysis of MD4 and SAFER", *Fast Software Encryption-Leuven workshop*, Springer-Verlag, pp.286-297, 1995.

[ZPS93] Y.Zheng, J.Pieprzyk, J.Seberry, "HIVAL - a one-way hashing algorithm with variable length and output," *Advances in Cryptology-Auscrypt'92*, LNCS Vol.718, Springer-Verlag, pp.83-104, 1993.

.